1920年代中国における主流雑誌の性愛・道徳論争と日本

肖　　霞*・村上林造

Sex, Moral Argument and Japan in Chinese Mainstream Magazines in 1920s

XIA Xiao, MURAKAMI Rinzou

(Received September 26, 2014)

一、はじめに

1919前後、中国現代文学史･文化史上に行われた新文化運動が始まった。「民主」「科学」「自由」の旗を高く挙げた新時代の文化人は、偶然に出会った疾風怒濤のような新文化運動を起こした。それは中華民国以来の政治の不安定と欧美文化との接触によるインパクトなど、様々な思想や主義を取り込み、取り混ぜた結果、激しい勢力を形成し、封建社会に残された旧思想と旧道徳を洗い清めていた。社会には東洋的な独特のルネサンスの雰囲気が漂って、各階層の民衆がその啓蒙思想を受けて新しい時代を開こうとした。このように思想・文化の革新が図られる中で、真っ先に攻撃の矢面に立ったのは、人間の問題をめぐる人間性を束縛する旧道徳への批判だと言えよう。この運動の最中に、貞操、性愛と道徳をめぐる論争が、早くも自由恋愛の思潮となって全国的に隅々にまで広がった。その中で、特に個人の問題、婦人問題及び男女ともに非常に関心を持った恋愛・結婚の問題は、この時代を代表する流行語になっている。中国の歴史は、このように新しさと古さ、自我と家庭の対立と論争の中で進んで行き、新しいページを開いた。21世紀に入って、かつて中国の思想・文化を動かしたこの道徳革命を顧みる時、1920年代の『新青年』『婦女雑誌』『晨報』などの主流雑誌を舞台に広く論争された「貞操問題」「新性道徳問題」、「イプセン号」特集の編集及び「愛情大討論」[1]などは、大きな意義を持っていると同時に、近隣の日本社会とかなり関係があると多くの研究が指摘した。本論文は、中国歴史上はじめて取り上げられた「貞操問題」「新性道徳問題」「イプセン号」特集を中心に、日本との関係を明らかにする上で、この広範囲にわたる論争が、どのような意義と不十分性を持っているのかを分析してみたい。

二、『新青年』における「貞操問題論争」

1920年代まで、中国は数千年来の男性中心社会の文化が続いてきたが、男性中心の社会を維持する家父長制度は、一夫一婦制が異本となったものである。また血縁関係の純粋性を強化するために、貞操問題は特に重要視されている。更に社会文明の発展に従って、貞操は次第に女性の行為を評価する道徳基準に変わっていく。支配者が、女性たちの振る舞いや言説などを束縛し、女性の心身を踏みにじる隠し道具としてよく利用したのは、この貞操問題である。中華

*山東大学外国語学院

[1] 1923年、北京大学の教授張競生により『晨報副刊』に「愛情定則」の討論を起こして命名される。個人愛情の主観性と随意性を主張するので社会の注目を呼んだ。

民国の初期、民族危機と政治の不安定に伴って、長い間続けてきた固有の封建思想は、ますます重視され強化された。1914年、袁世凱は『褒奨条例』を公布し、「女性が節を守り、節に殉ずること、世の模範になるものは、（中略）この条例の褒奨を得る」[II] べきだと決めた。それと同時に、政府はとりわけ賞状を贈与し褒賞を示す。1917年、冯国璋は、さらにその中の条例と細則を明確に分け、詳しく規定した。「節を守ること、五十歳まで」を「上限」とし、「若年」でなくなる場合は、「節を守ること」、満十年を限界とする。その影響下、政府の呼びかけと励ましに相応して、節を守り、夫の死に殉ずる女性が多くなり、ジャーナリズムが騒いだ内容となっている。政府の呼びかけが「民主」「自由」を追求している社会雰囲気とかなりずれているので、貞操問題を中核とする道徳問題は、1920年代活躍している文化人がよく考えなければならない問題となっていく。

実は1916年に入ってから、中国における主流雑誌『新青年』は、この問題に大きな関心を持つようになった。編集長を勤めている陳独秀は、先覚の文化人として、鋭い感知力によってこの問題の重大性を認識し、「女子教育」「女子職業」「結婚」「離婚」「避妊」「女子参政」などの問題を巡って、所見の発表を公開募集した。1916年の９月号には、「特別啓事」を掲載し、次のように書いている。「女子は国民の半数を占めている。尤も家庭の中で無上の責任を負っている。国家社会の改進を図ろうと欲するには、女子問題がもとより等閑視されてはならぬ。そして家族制度が不良のため、社会に不安の現象を齎すということは、今日の重大な問題になったのではないだろうか。これらの問題の解決は、女子と関係ないとは言えない。（中略）敢えて女子同胞諸君に『女子教育』『女子職業』『結婚』『離婚』『再婚』『姑嫁同居』『独身生活』『避妊』『女子参政』『法律上の女子権利』など、女子に関連する重大な問題に関して自由に其の中から一つ選び、それぞれご所見を本誌に発表していただく。」その呼びかけに応じて、1918年５月15日、周作人が『新青年』第４巻第５号に翻訳・発表した「貞操論」は、大きな出来事となった。それは「中国歴史上初めて貞操問題についての論争」[III] を引き起こして、「胡適のような温和改良派の反響を呼んだばかりではなく、全思想界の考えのずれということも浮上させた。（中略）この文章は、周作人一生涯の翻訳作品においては、たいしたことはないものであるが、不意の中で中国歴史の有様を改変した」[IV] と評価された。

「貞操論」の原文は、日本近代の女性歌人・作家・思想家の与謝野晶子（1878−1942）が1915年11月に発表した論文「貞操は道徳以上に尊貴である」（第三評論集『人及び女として』所収）が、周作人が意訳の形で「貞操論」という新しいタイトルを付けて発表したものである。それは近代の中国と日本を思想的に結びつける架け橋となった。

中国と日本は、東アジアにある国であるが、長い間、儒教を中心に構築したイデオロギー思想の元で歩んできた。近代以来、先進的なヨーロッパに追いつき、国の発展を図る時、両国が直面した問題はほぼ同じである。啓蒙者がいち早く痛感したのは、女子教育と女性の問題である。近代化の国を建設し、欧米の列強と競争できる優秀な人材を育てることが重要視され、国民の半数を占める女性の役割がどうしても欠かせないものと認識した。日本では、明治期に発布された民法によって、女性に対した制限が前より厳しくなり、人間扱いをせず、無能者・低能児・生殖の道具として地位の低い従属的な存在となった。基督教教育者の巌本善治から、福

[II] 袁世凱 「褒奨条例」『政府公報』 1914年３月12日
[III] 尹旦萍 「新文化運動中関于貞操問題的討論」『婦女研究論叢』 総第50期　2003年１月第１期
[IV] 高志强、王海鷹 「一篇翻訳的思想史意義」『吉林省教育学院学報』 第27巻2011年第12期

沢諭吉、加藤弘之をはじめとする「明六社」のメンバーたち、自由民権論者の植木枝盛らは、女子教育や女性問題について真剣に考えて、いろいろと論争していた。その結果、大正期に入ると、女性を束縛した貞操のこと、結婚をめぐる家族制度と家父長制度など、所謂固有の社会制度や倫理道徳は、女性の不幸を招く根源だと深く認識し、激しく攻撃した。その中で、男性の有識者ばかりではなく、与謝野晶子、平塚らいてう、伊藤野枝のように近代化途中で育った女性理論家の言説も見逃すことはできない。1913年に入ってから、ジャーナリズムの攻撃と世間が騒いでいる中で、女性文芸誌『青鞜』は最初の文学志向を変更して、女性問題を考えざるをえなくなって、第二の時期を迎えていた。さらに、1914年９月、青鞜社員の生田花世は『反響』で「食べることと貞操」を発表し、現実社会の状況下の女性生存問題について論じ、貞操論争の幕を開けた。その反発として、同社員の安田皐月は「生きることと貞操」を発表し、実生活の経験から自論を述べた。二人の論争は社会道徳に強化された「貞操」は、女性の「食べる」と「生きる」挾間をどういうふうに守るのかという点に焦点が当てられていた。二人が集中的に取り扱った「貞操」問題は、理論家の伊藤野枝と平塚らいてうに注目された。1915年２月、伊藤野枝は『青鞜』２月号で「貞操に就ての雑感」を発表し、冒頭部分に「在来の道徳の中でも一番婦人を苦めたものは貞操であるらしい。」と、現実の日本では、「最も不都合な事は男子の貞操をとがめずに婦人のみをとがめる事である。これは最も婦人の人格を無視した道徳であると思ふ。（中略）男子に貞操が無用ならば女子にも同じく無用でなくてはならない。（中略）処がこの不公平な見解が一般の婦人達をして大変な誤まった考へに導いた。」[V] と指摘、貞操問題における男女の不平等を告発した。それはアナーキズム思想の影響を受けて、社会問題の解決を旨とし、「貞操」問題を社会道徳と強く結びつける激しい発言である。以上の三人の発言に対して、平塚らいてうは結構不満足で、同年３月に「処女の真価」を発表し、「処女を捨てるに最も適当な時」[VI] をめぐって次のように論じた。「実に婦人貞操の第一歩はここにある。処女を純潔に保ち、それ自身に最もよき時に処女を捨てるということにあるのである。」その「最もよき時に」ついて説明すると、「それは恋愛の経験において、恋人に対する霊的憧憬（愛情）の中から官能的要求を生じ、自己の人格内に両者の一致の結合を真に感じた場合」。[VII] 即ち、霊肉一致の結婚が到来する時、処女を破棄すべきと主張した。その結果、青鞜女性たちは未婚女性の純潔さ、貞操について選択の自由、女性の解放運動が必然に女性の道徳革命を含めるなど、共同的な認識を得た。[VIII] この女性の身体解放を強調する貞操論争は、社会の大きな反響を呼んだが、男性の知識人大杉栄、安部磯雄、松本悟郎も積極的に参加、発言した。そのような社会雰囲気を背景に、与謝野晶子は、1915年11月「貞操は道徳以上に尊貴である」という文章を発表した。その文章は、①道徳についての理解、②貞操は特に女性向けるか、或いは男女双方向けるかの二点にまとめられる。①について、「私達はあらゆる虚僞と、あらゆる壓制と、あらゆる不正と、あらゆる不幸とから脱れて、最も眞實な、最も自由な、最も正確な、併せて最も幸福な生活を實現したいと渇望して居ります。私達はこの實感を基礎として一切の問題を

[V] 伊藤野枝「貞操に就ての雑感」『青鞜』 第５巻第２号　1915年２月

[VI] 平塚らいてう 「処女の真価」『婦人公論』 1915年３月　平塚らいてう著作集編集委員会『平塚らいてう著作集』（第２巻）大月書店　1983年８月　第57頁

[VII] 平塚らいてう 「処女の真価」『婦人公論』 1915年３月　平塚らいてう著作集編集委員会『平塚らいてう著作集』（第２巻）大月書店　1983年８月　第58頁

[VIII] 参照肖霞 『元始　女性是太陽―“青鞜”及其女性研究』 山東人民出版社　2013年6月　第171–176頁
劉軍 「『新青年』時代の周作人と日本―「貞操論」を中心に―」『人文学研究所報』第37号　2004年３月

整調して行く外はありません。」[IX] と晶子が自分の融通がきく生活態度を表明した。続いて道徳は、「私達の生活のために制定されるので、其れが不必要になり、または私達の生活を害するに到れば漸次に改廢すべきものであらうと思ひます。」「私達はあらゆる壓制から脱れ、不用な舊思想や舊道徳から自己を解放して行くことが私達の生活に意義あらしめる一つの重大條件だと考へて居ます。」と書いている。晶子から見れば、道徳は人間生活を向上させるために作ったものであり、いつでもどこでも改善できる。旧思想や旧道徳を守ることが必要ではなく、自分自身を解放することは何よりも重要である。②について、晶子は自分が貞操の起源や歴史などの基本知識について論じていないが、特に関心を持っているのは、「貞操に對する現代人の聰明な解釋と眞率な實行」である。現代人が貞操について説明することが何より重要である。貞操を守るのは別に、それより重要なのは矛盾があるかどうかの問題である。「貞操が人間共通のものであるべき」、もし女性は守らなければならないと、男性には「寛假される」と矛盾のあるものとなって、人間生活を破綻失調させるので「信頼することの出來ないもの」となっている。また、貞操は道徳として都合や体質によって守る場合も守れない場合もある。要するに、他人に強要することが古いものであるから取り除くべきである。現代人は、拘らない新しい道徳を歓迎する。「愛情が合へば協同關係を結び、愛情が破裂すれば別れてしまふ」というやり方は、極自然のことである。しかし、現代の結婚を見ていれば、太抵の場合「男女の一方が一種の奴隷となり、一種の物質となつて、一方に買はれて居る状態」、所謂「一種の賣淫」で、不合理で矛盾のある結婚である。「結婚から成立つた夫婦に向つて靈肉一致の貞操を期待するのは夫婦の何れに向つても苦痛を與へ、虚僞を強ひるものではない」から、「靈肉一致の貞操を期待する」。最後に「私の貞操は道徳でない、私の貞操は趣味である、信仰である、潔癖である。」「私の貞操を絶對に愛重して居るのは藝術の美を愛し學問の眞を愛するやうに道徳以上の高く美くしい或物――假りに趣味とも信仰とも名づくべきものだと思つて居ます。」と結論付けた。

この文章は、欧米の事情、自由主義の女権家エレン・ケイの思想などを取り入れて、氏本人の大きな関心を持った貞操と道徳の関係を多岐にわたって論説し、内容豊かな貞操論と評価できる。周作人がそれを読んで感動し、「前書き」に晶子を「現今日本第一流の女性批評家であり、極進歩、極自由、極真実、極正確な大きな婦人である。」と書いて、晶子の文章を「純粋健全な思想を有する」と高く評価した。そればかりでなく『新青年』の編集者も同じ感想を持って、それをきっかけに貞操論争を発起するように決めた。すると、北京の文化界で胡適、周作人、蘭志先を中心に中国はじめての貞操論争を行った。同年７月15日、胡適は『新青年』（第５巻第１号）に「貞操問題」という文章を発表して、冒頭部分に周作人が翻訳した「貞操論」を高く評価し、「周作人先生が翻訳した与謝野晶子の『貞操論』は、私が読んでから感動させられた。この問題は世界に何千年も無意識な迷信を蒙って、近く何十年中、西洋の学者が正式にこの問題の真の意義を討論し始めた。（中略）今のところ、家族制度が一番厳しい日本にもこのような大胆の議論も出てきた！これは東洋文明史上極めてめでたいことである。」と、続いて、新聞紙上に掲載された殉節女性の自殺行為を批判し、中国人としての貞操問題について彼独自の意見を述べた。「第一、この問題は“至極当たり前のこと”ではない。第二、貞操は男女双方交互の道徳だと思う。第三、私は貞操褒揚の法律を絶対反対する。」と、ヒューマニズムの立場に立って、節を守る、夫に殉する野蛮の法律を批判した。その後、胡適は『国民日報』の編

[IX] 与謝野晶子　「貞操は道徳以上尊貴である」　yahoo.co.jp aozorabunko

集長蘭志先に手紙を出して、貞操についての意見を発表するようと誘っていた。蘭は積極的に対応し、与謝野晶子の「貞操は道徳ではない」という観点に反論を持ち出し、貞操が夫婦の間に守らなければならない道徳であると強く主張した。

要するに、明治、大正時代に活躍した与謝野晶子は、日本代表の女性批評家、道徳家として中国の文化人に受け入れられ、その取り出した貞操問題は、中国の貞操論争の烽火となって、いっそう広げられた。

三、『婦女雑誌』における「新性道徳論争」

商務印書館が、当初商用目的で創刊した『婦女雑誌』(1915-1931）は、前後の志向によって大体四つの時期に分けられる。第一期は王蘊章の時代（1915–1919第１－６巻)、良妻賢母主義を唱える婦人雑誌。第二期は章錫琛の時代（1919–1925第７–11巻)、革命と急進な婦人雑誌。第三期は杜就田の時代（1925–1930第12–16巻)、女性の婦人雑誌。第四期は葉聖陶・楊潤餘の時代（1930–1931第16–17巻)、短い革新の婦人雑誌である。前後合わせて17巻204号を世に出した。[X] この雑誌は、最初日本博文館の『太陽』を模倣して創刊したものであるが、女性雑誌が盛んに創刊された時代で、強い競争力を保つために、同社所属の『東方雑誌』で活躍している章錫琛を呼んできて、ユニークな女性雑誌を目指して続けていた。初期の章錫琛は、女性問題に関わる知識をそれほど持っていなかったが、周樹人、周建人、瀋雁氷、呉覚農のような文化人を採用して、女性問題を中心に論じてきた。また雑誌を大きく改革をして読者を導く方向を取らず、読者とのコミュニケーションを重視する編集指針に変えた。そうすると、発行部数は前の三千部から一躍して一万部以上に昇った。このことは中国婦女雑誌界の新紀元を開いたと高く評価される。しかし最後に第11巻第１号において「新性道徳号」（専集）を出したことにより、不満や憤慨を招いてやむを得ず章錫琛は辞任した。

実際に、1925年第11巻第１号に「新性道徳号」を出した前に、中国の文化人は女子教育、職業、恋愛、結婚、離婚、売春など各方面から婦人問題をめぐって討論を続けてきた。この号に掲載された文章は、主に「新性道徳とは何か」（章錫琛)、「性道徳の科学的標準」（建人)、「性道徳の唯物史観」（雁氷)、「現代性道徳の傾向」（蕎峰)、「エレン・ケイの『恋愛と道徳』」（瀋沢民)、「近代文学における新性道徳」（黙会)、「恋愛とは何だろうか」（李宝梁）などである。章錫琛は、「人類最大の義務は、国家・未来・世代の進化と向上である。両性の関係は、男女双方の幸福に関わるばかりではなく、とりわけ未来世代の誕生に関わることである。だから、性の道徳の重要さは、実に一切社会の道徳の中に第一位を占める。」「自由と平等は、人類の共同的な要求である。だから凡そ他人の自由を侵害する、平等精神に違反する行為は、すべて不道徳ではない。」「性の道徳は、完全に社会と個人に有益することを絶対の標準とすべき、消極な方面から言えば、凡そ社会と個人に障害ないものに対して、我々は絶対に不道徳とは称しない。（中略）配偶者二人の許可を得て、一夫二妻か二夫一妻のような不貞操の形を持つさえも、社会と個人に障害を及ぼさないと、不道徳とは思えないことである。」[XI] と主張し、それは、章錫琛が「女子教育を拡大し、経済の独立を図り、旧道徳・旧法律を攻撃するには、また旧家庭の改革などの問題を解決する根本的方法は、唯恋愛自由を提唱するしかない」[XII] と思ったから

[X] 参照「婦女雑誌」 http://baike.baidu.com/view/2890972.htm
[XI] 章錫琛 「新性道徳是什么」『婦女雑誌』 第11巻　第1号　1925年1月
[XII] 章錫琛 「恋愛問題的討論」『婦女雑誌』 第8巻　第9号　1922年9月

である。周建人は性科学の角度から、人間性に違反する伝統的な性道徳観を批判し、恋愛自由と産児制限は近代道徳の二つの中心問題であると指摘。また、男女の生理、心理及び分業役割の違いを認め、その上に平等的な両性関係を作ると主張した。「我々の必要する新道徳には、第一、人間の自然欲求は正当のものとする。しかし、この要求の結果は自己と他人を害損しないことである。第二には、性行為は、将来の子孫存続に関わっている。そこで民族の利益をさらに配慮しなければならない。これは今日の科学的な性道徳の基礎である。」とし、新性道徳の中心思想は、「両性関係を極私的なこと、子供を作ることを極公的なことと見なす。」[XIII] 道徳とは、人間の欲求を満たすことであり、「すべて人間の自然に適応するものは、道徳的であるが、人間の本性を違背するものは、不道徳的である。これは現代『科学的な人生観』の元にある道徳の根本基礎である。」[XIV] と指摘した。瀋沢民はエレン・ケイの代表作『恋愛と道徳』を翻訳したが、ケイが主張する性道徳は、全部『恋愛と結婚』の中に現れ、社会、家庭、法律など外的な干渉を受けない恋愛の絶対性を説明した。エレン・ケイの主張は、新性道徳の代表として、その独特な理論は科学に基づく人間肯定、個人解放、肉体肯定の価値を備え、目的は人種改良を通して人類の進歩を促進することである。その他に、彼はエレン・ケイの母性保護、児童教育も紹介した。黙会の文章は島村民蔵の「近代文学に現れたる両性問題の研究」を翻訳したものであるが、原文の“両性問題”を直接に“新性道徳”で表現された。文章は「愛即ち人間性」、「愛を基礎にする結婚」の二部からなっている。前半は、西洋両性問題の発展の有様を整理し、三つの時代（両性問題と性欲衝動を主張し獣のような女性、精神恋愛を高唱し超人間的な女性、性欲衝動と精神恋愛と結び合わせ人格的な女性）に分けられ、特に第三の時代は、19世紀の後半及び現代のものであると説明した。後半は、主に恋愛と結婚の問題をめぐって論じた。エレン・ケイは其の最初の主唱者とは言えないが、人形の家、群鬼、海上夫人などの作品を創作したイブセンのほうが先に考えていると説明した。現代の結婚生活を見ていると、大体恋愛のない結婚或いは最初恋愛があったが、後でだんだん消滅してしまうケースが多い。最後にエレン・ケイの作品『母性の復興』を紹介し、その母性保護運動は、女子の参政権運動、職業運動と同様に、近代婦人運動の二大潮流となったと説明した。雁氷は「性道徳の唯物史観」の中に離婚問題について、「恋愛神聖と離婚自由は新性道徳の両翼であり、恋愛の神聖を保つと同時に離婚の自由を取らなければなならない。両性関係はこのような過渡期に離婚自由を取ると、恋愛神聖が実現できる。」[XV] と述べた。しかし、社会の人々は因習道徳の影響で、離婚自由に反対すると指摘した。

恋愛至上と離婚の自由を中心とする新性道徳説は、エレン・ケイ女性主義の主な内容である。ケイとその独特な女性思想は、大正時代の日本において流行になったことは、金子幸子の研究で明らかになった。日本において最初エレン・ケイとその思想について紹介したのは、1905年の『女子教育』であり、1911年『太陽』９月号に編集者金子築水の文章を掲載し、其の中に列挙した多くの思想家の一人としてケイの名前を取り上げ、人類の進歩と発展に肯定的な信念、ニーチェの特徴を強く持っていると紹介した。また、その主張する恋愛結婚は、自然主義の官能論と違い、霊肉一致の恋愛を強調し、これは疑いなく現実人生に大きな意義を持っていると指摘した。1912年、石坂洋平は『恋愛と結婚』の第八章「自由離婚説」を『太陽』に掲載した。

[XIII] 建人 「性道徳之科学標準」『婦女雑誌』 第11巻　第１号　1925年１月
[XIV] 蕎峰 「現代性道徳的傾向」『婦女雑誌』 第11巻　第１号　1925年１月
[XV] 雁氷 「性道徳的唯物史観」『婦女雑誌』 第11巻　第１号　1925年１月

その後、金子築水に師事した本間久雄、原田実は、エレン・ケイ作品の紹介と思想普及に力を入れた。本間久雄は、翻訳作品『婦人と道徳』(1913)、『未来の時代のために』(1916)、『戦争、平和及び将来』(1918) を出版した外、「エレン・ケイ思想の真髄」(1915)、「現代婦人問題」(1919) などの評論を発表して、エレン・ケイの恋愛観と性道徳観をめぐって討論した。本間久雄が読み取ったのは、主に社会改造家としてのケイであるが、恋愛関連の結婚制度の改革に重点を置き、またその母性主義の構築、主張した婦人解放を優生学へ発展し、種族の改良によく関わると強調した。本間久雄が読み取ったケイの思想は、大正時代の日本人の思想形成に大きく貢献した。原田実は『児童の世紀』(1916)、『婦人運動』(1916)、『恋愛と結婚』(1919抄訳、1920年全訳) などの作品を翻訳出版した。其の中の『児童の世紀』は、日本人に大きな所感をもたらし、大正時代の自由教育実践の中でよく生かされて、日本近代教育の発展を促進した。女性の場合においては、1911年９月成立した“青鞜社”は、1913年に世間の攻撃を受けて行き詰まり、平塚らいてうが“新しい女”の問題を考えなければならないと思った時、偶然出会ったのがこのエレン・ケイの『恋愛と結婚』であり、それをきっかけに本格的に女性問題を研究し始め、ケイの思想はらいてうの女性解放思想の基本となった。『恋愛と結婚』は平塚らいてう、山田若により翻訳され、『青鞜』誌上にも掲載された。続いて『母性の復興』は1919年平塚らいてうによって、『恋愛と道徳』1926年伊藤野枝に翻訳出版された。その後、評論家の厨川白村はエレン・ケイの影響を強く受け、『近代の恋愛観』(1922) を著し、その思想を恋愛至上主義と見なした。「恋愛は悠久永遠の生命の力がこもる」という言葉が当時の若者を魅了した。要するに、大正時代の日本人はいろいろ方面からエレン・ケイの思想を読み取り、各自の理論を体系し、児童教育者、社会改良者、母性保護主義、哲学者、恋愛至上主義などのエレン・ケイ像がそれぞれ形つけられた。[XVI]

エレン・ケイの思想の最も早く中国への伝播は、1918–1920年間周作人と瀋雁氷の文章に現れるが、正式に大量紹介されたのは『婦人雑誌』という現代言説空間であると今までの研究で知られている。[XVII] 瀋雁氷 (1896–1981) は中国現代有名な作家、文学評論家、社会活動家、五四期新文化運動の先駆者である。1916年８月、貧しくて進学できないので上海の商務印書館の翻訳編集所に入って、英文部で英語翻訳文の修正を担当していた。1920–1923年間文学雑誌『小説月報』の編集を担当していた。1928–1930年間日本に流亡した。彼がエレン・ケイの思想に触れて紹介するのは、日本を経由することではなく、英文資料によるものである。1920年『婦人雑誌』第６巻第２号に「男女社交公開問題管見」、『解放と改造』第２巻第４号に「女子参政運動を評ず」、『東方雑誌』第17巻第３号に「世界二大系の婦人運動と中国の婦人運動」などの文章において、エレン・ケイの名前やその思想を取り上げて説明し、『恋愛と結婚』をも抄訳し発表した。その上でケイの『母性の復興』『婦人運動』『児童の世紀』などの作品を読んで、その恋愛と結婚、母性主義などに深く共鳴した。「私の主張かつ信じたのは、婦人問題が論理改造、両性関係、即ち精神方面から始めるべき、それは文化運動の真的意義に合うのである。」[XVIII]「女子解放の意義は、中国においては恋愛を発見することである。」[XIX] と発言した。

[XVI] 参照金子幸子 「大正期における西洋女性解放論受容の方法―エレンケイ『恋愛と結婚』を手がかりに―」『社会科学ジャーナル』(国際基督教大学社会科学研究所編) 第24巻第１号 1985年10月

[XVII] 白水紀子 「《婦女雑誌》における新性道徳論―エレン・ケイを中心に」『横浜国立大学人文紀要 第二類 語学 . 文学』(横浜国立大学教育学部編) 通号42 1995年10月

[XVIII] 瀋雁氷 「社論 家庭服務与経済独立」『婦女雑誌』第６巻第５号 1920年

[XIX] 瀋雁氷 「解放与恋爱」『民国日報・婦女評論』1922年３月29日

瀋雁氷と瀋沢民兄弟以外の文化人は、殆ど日本の書籍からケイの思想を取り入れ、特に本間久雄の著作から読み取ったものが一番多い。章錫琛が、当初『婦人雑誌』を引き継いで、「新思想運動において婦人問題も当時熱烈に討論した分野となった。私はこの方面において完全な素人である。苦しい時の神頼みとして、図書館から何冊の日本の書を探し読んで、あっちこっちから写してすこし文章を書いて対処する。（中略）専門家を偽装するために、議論と主張はますます激しくなった。」[XX] と告白している。こうすると、1920−1925年間、本間久雄が書いたケイの著作は、章錫琛、呉覚農らの中国文化人に読まれ、『婦人雑誌』に翻訳、紹介するようになった。例えば、「性の道徳の新傾向」（1920年11期）、「エレン・ケイ女士及びその思想」（1921年２期）、「エレン・ケイの更新教化論」（1921年６期）、「エレン・ケイの自由離婚論」（1922年４期）、「エレン・ケイ世界改造と新婦人責任論」（1922年10期）などが挙げられる。『エレン・ケイ思想の真髄』はYDによる整理出版する計画もあり、『婦人問題十講』は章錫琛が先に翻訳文を連載したが、1924年単著も出版した。

以上から分かるように、エレン・ケイの独特な女性解放論は、日本を経由して、特に文芸評論家の本間久雄によるユニークな読解が、1920年代の中国の文化人に大きな影響を与えた。伝統打破、社会改造、及び新社会制度の再建など、1920年代の文化人の有力な思想武器となっていた。

四、『新青年』における「イプセン号」特集

1918年６月、胡適は、『新青年』雑誌の編集長に勤めていた最中である。かれが第６巻第４号に「イプセン号」特集を組んで、イプセンについて熱狂的に紹介した。巻首に胡適の名篇「イプセン主義」に続いて、イプセンの代表作『ナラ』（胡適、羅家論全訳）、『民衆の敵』（陶履恭抄訳）、『小さなエヨルフ』（呉弱男抄訳）を掲載し、その次に袁振英の書いた『イプセン伝』も掲げた。胡適は「イプセン主義」の中に、「我々は現在『イプセン号』を出して、大がかりに宣伝し、イプセンを中国に紹介しよう。」と宣言した。1920年代中国の新文化運動は、イプセンの到来に豊かな土壌を用意しておいたと言えよう。

イプセン（1828−1906）は、ノルウエーの戯作家、詩人、舞台監督である。近代演劇の創始者であり、「近代演劇の父」と称される。シエイクスピア以後、世界でもっとも盛んに上演されて人気がある劇作家とも言われる。代表作には、『ブラン』『ペール・ギュント』『人形の家』『野鴨』『ロスメルスホルム』『ヘッダ・ガーブレル』などが挙げられる。その劇作は当時家庭生活や礼儀についてのヴィクトリア朝的価値観がヨーロッパで大きく広まっている間、それらに対するいかなる挑戦も不道徳的で非常識とされていたため、多くの人にスキャンダラスと考えられた。イプセンは生活状況や道徳問題について批評的な眼や疑問を紹介するため、主に現代劇に基礎を置いた。ヴィクトリア朝の演劇には、悪の力に立ち向かう高潔な主人公が期待されており、あらゆる劇は善が幸福をもたらし、不道徳は苦痛のみをもたらすという、道徳的にふさわしい結末で終わった。イプセンはこの考えと当時の信仰に挑み、観客の持つ幻想を破壊したところに大きな価値があり、世界各地に影響を及ぼした。

中国人はこの偉大な演劇家のイプセンとの出会いが、日本を経由していることは、周知のとおりである。初めてイプセンのことを紹介したのは、日本留学中の魯迅である。この点について多くの研究に指摘されたが、陳玲玲の研究によると、1906年（明治39）、イプセンの死を契

[XX] 章錫琛　「一個最平凡的人」『明社消息』　1947年２月

機に日本でイプセン・ブームが沸き起った。丁度、この年魯迅は、ノート検査事件と幻灯事件のため、仙台医学専門学校を辞めて東京のドイツ語学校に入った。周作人の思い出によれば、魯迅がイプセンを読んだのはこの時期であった。[XXI] 日清戦後及び日露戦争前後の日本は、いきいきとする上昇期に新たな文化ブームを形成し、欧米の様々な思想や文化を直輸入して文壇を飾っていた。魯迅が、その時代精神の中で、特にイプセン・ブームやニーチェ・ブームの中で読み取っていたのは、当時中国人の精神世界に欠けている強硬な個性と「超人」のイメージである。魯迅の取っているイプセン像は、具体的に日本で発表された文章「摩羅詩力説」(1907)、「文化偏至論」(1906)[XXII] に現れている。例えば、「摩羅詩力説」の中で、魯迅は欧米の反社会の浪漫主義の詩人と作家を列挙して、特に次のようにイブセンのことを述べている。

「やせた土地から、われわれは何を収穫することができるだろう。(中略) あらゆる事物は、慣習という、極めてあやふやな衡によって左右されている。世論なるものは、実に大きな力を持っているが、その世論の闇が地球全体を蔽っている。」と、このバイロンの言葉は、近世ノルウエーの文人イプセンの見解と正に一致している。イプセンは近世に生まれ、世俗の昏迷を憤り、真理の輝きがかくれていることを悲しんで、「社会の敵」を借りてその主張を述べた。戯曲の主人公である、医師ストックマンは、あくまで真理を守って、愚劣な俗人ばらに反対し、結局、民衆の敵という悪名をつけられた。彼自身は、土地の人々に追い立てられた上、その子も学校から排斥されるのだが、彼はあくまで奮闘して、いささかも動揺しなかった。そして最後でこういっている。「私は、また真理を発見しました。地球で一番強い人間は、独りで立っている人です。」イプセンの人生に対する態度もこれと同じであった。[XXIII] 魯迅がイプセンの戯曲の中から読み取れたのはバイロン像によってよく説明した。自由と真理を求めるために、最後まで戦う戦闘者であり、特にその「力戦して斃れても、精神は決して斃れなかった」精神界の戦士像が捉えられる。また「文化偏至論」の中で何回イプセンのことに言及している。例えば、デンマークの哲人キルケゴールのことを紹介した後、「激しい憤りを発して、個性を発揮することのみが、至高の道徳である」と評価した。イプセンが文学の世界に登場し、その卓越した文才と識見によって、キルケゴールの注釈者と称せられたと説明した。その作品『民衆の敵』において歪んだ世の中を「慷慨激昂して、自ら禁じ得ない」「世俗に阿らぬために、社会に容れられない」[XXIV] 人間像が描かれた。魯迅が見たニーチェやイプセンのような人々は、信念に基づき、時流に反抗し、主観傾向の極致を示した個人主義の代表者と思われる。

もう一方、日本の新劇運動はイプセン劇の上演から始まったと言われる。『人形の家』の主人公ノラは、当時の“新しい女”として語られた。日本近代の新劇運動の形成と発展中、“春柳社”[XXV] の陸鏡若（1885–1915）は、日本留学中“文芸協会”と坪内逍遥との交流を通じて、イプセンの劇作に触れて紹介した。1914年９月創刊した『俳優雑誌』（１期しかない）に６頁もある“社説”欄には、「イプセンの劇」(陸鏡若口述、冯淑鸾整理）という文章が掲載され、

[XXI] 周作人「魯迅的故家　看戯」『周作人自編文集』 河北教育出版社　2001年　313頁

[XXII] どちらでも日本で発行する『河南』雑誌に掲載した

[XXIII] 『魯迅選集』(第５巻)　岩波書店　1986年　第59頁　　参照陳玲玲 「留学期の魯迅におけるイプセンの受容」『多元文化』 第５号　1994年

[XXIV] 『魯迅選集』(第５巻)　岩波書店　1986年　第21頁　　参照陳玲玲 「留学期の魯迅におけるイプセンの受容」『多元文化』 第５号　1994年

[XXV] 1906年、東京で中国留学生によって創建された劇団。李淑同、層孝谷を創始者、欧楊与倩、陸鏡若などがメンバーとして加入、様々な文芸の研究を目的に、最初も演出部を創建した。その活動は中国早期演劇史上大きな影響を残した。

その中でヨーロッパにおいて古代から近代にかけての演劇の歴史をはじめとする各国の代表的な劇作を紹介し、シュイクスピア、モリエールなどの十二名の劇作家を取り上げて、イプセンのことも重点に紹介した。最後にイプセンの作品を11部も列挙した。この「イプセンの劇」は中国本土で初めてのイプセン紹介文章であると最近の研究で分かった。[XXVI] 伊藤虎丸の指摘したように、魯迅や陸鏡若のような日本留学生は、日本の明治30年代文壇をよく知って、それと「同時代性」を持っていることはいうまでもない。[XXVII]

以上のように、魯迅や陸鏡若などの留学生は、日本或いは日本文壇を橋掛かりにして、劇作家のイプセンとその作品を読んで受容し、紹介した。それはイプセンが中国の文化人に知られ好まれ、中国へ進出する前駆けと言える。しかし、それはまだ大きな影響が見えていないが、1917年始まった新文化運動は、個性解放は時代ブームとなり、女性解放は問題焦点として注目され、イプセンの作品は目覚めた中国人に受け止められて熱狂的に宣伝され、多くの作品も翻訳された。各階層の思想啓蒙や女性解放運動に大きな影響を与えたと同時に、話劇の形成にも直接の影響を与えた。胡適、魯迅、周作人、郭沫若らを代表とする文化人は、それぞれの立場に立って「健全な個人主義」（胡適）、「写実主義」（胡適）、「精神界の戦士」（魯迅）などのようにイプセン主義の真髄をまとめたが、作家たちは「イプセン劇作における思想ばかりでなく、物語の言説形式さえも模倣した。」[XXVIII] と言える。イプセンは自分の作品の中でただ社会問題を取り上げ、具体的な解決方法には全然ふれていないが、中国の作家たちは、その取り上げた問題と様々な読み取りを通して、社会現実の暗黒を暴き、社会問題を解決するようになった。『新青年』における「イプセン号」特集において、集中的に一人の作家をめぐって討論をするのは、歴史上初めてである。それについて茅盾は高く評価している。「イプセンと近年来我が国を揺り動かした新文化運動は、普通なみの関係ではない。（中略）『イプセン号』特集は、この北欧の大文豪を文学革命、女性解放、伝統思想への反抗など新運動の象徴とされた。その時、イプセンという名前は若者の間によく広げられ、口々に伝えられ、現在流行になったマルクスとレーニンに劣らない。」[XXIX] 作家の阿英も「これらの紹介と翻訳の出現により、主に五四期の社会改革と結びつけて、イプセンは当時の中国において大きな波蘭を呼んだ。新しい人は皆熱狂に彼に憧れている。あらゆる新聞は一斉に彼のことを語る。中国婦人界にナラのような人物が多く出現した。イプセンの戯曲、とりわけその作品『ナラ』は、当時の婦人解放運動中決定的な役割を果たした。」[XXX] と評価した。

五、まとめ

近代以来、日本はいち早くヨーロッパに追いつこうとした過程で、ヨーロッパの進んだ技術や文化などを大量に取り入れ、民衆の啓蒙や価値観の改造に貢献した。その後、いろいろな受容、変容の結果、日本人はついに自国の発展の道を見つけ、急速に近代化の道を歩んでいった。しかし同時代の中国は、ヨーロッパ列強の分割を受け、苦難に満ちた生活の中でなかなか解放の道を見出せず、苦難から民衆を救うのは有識者の知識人が課せられた責務になった。その救

[XXVI] 魏名婕　「論日本的新劇運動給陸鏡若的影響」『演劇芸術』 2012年第４期
[XXVII] 伊藤虎丸　『魯迅と日本人：アジアの近代と「個」の思想』 朝日新聞社　1983年　第56頁
[XXVIII] 洪深　「中国新文学大系．劇作集．導言」『中国新文学大系．劇作集』 上海良友図書印刷公司　1935年　第20頁
[XXIX] 茅盾　「談談《玩偶之家》」『文学週報』 第176期　民国14年６月7日出版
[XXX] 阿英　「易卜生作品在中国」『阿英文集』 三聯書店1981年 第741頁

国救民の行動中、同じ東洋の日本に眼差しを向けて勉強しようとしたのは、手近な選択であった。その中で、日本留学の魯迅、周作人、郭沫若、陸鏡若などを先導にして、多くの留学生たちは日本の文壇雰囲気に感化され、また、日本という橋を利用し、西洋の知識と日本人が読み取ったものを吸収し、知的恩恵に恵まれて、救国救民の精神原動力を探していった。それが集中的に爆発するのは、1919年五四期の疾風怒濤のような新文化運動である。そうすれば、中国の新文化運動は、思想文化界のルネサンスに喩えられ、文化の花咲く時期である。その間に様々な思想や主義が海外から伝来し、代わる代わる上演して、人々の心に新風を吹き込んだ。その間、一歩先に歩んでいる日本の役割は見逃せない。しかし、それは有識者の伝統打破や思想革新の要求ばかりであって、国の固有体制や制度などを壊すことはなかなか出来なかった。それにしても、その思想啓蒙や論争は、多くの民衆に示唆を与えて、自国の暗黒さと束縛された人間性を認識させ、非人道的な制度や体制を打破するような動きが出てきた。主流雑誌に行われた「貞操問題」論争、「新性道徳問題」論争、「イプセン号」特集の編集及び「愛情大討論」などは、その花開きとして大きな意義を文化史に残した。その広範囲にわたる思想文化運動は、暗黒の社会を生きる愚昧無知の民衆に全面的な啓蒙を与え、史的な価値を持っているのは疑いない。しかし、21世紀に入って、もう一度この文化運動や論争を顧みる時、その意義を肯定すると同時にその不十分性も認識される。

第一に、1917年開始した新文化運動は、中国の思想文化発展の最高点を示したが、それは多くの参加者によく関わっている。参加者の身分から見れば、二種類に分けられる。⑴魯迅、周作人、胡適のように外国留学から帰国した学者であり、彼らは外国で習ったり、吸収したりして得られた思想や学問を中国にもたらし、いろいろ刺激を与えた。⑵陳独秀、李大釗、茅盾のように早くも国内の文化界で活躍している知識人であり、彼らは自国の先覚者として広範的な啓蒙活動をし続けてきた。文化人たちは、半世紀に渡る救国救民の模索と実践により痛感したことは、この時期についに合流して気勢雄大な新文化運動を形成した。彼らの思想や論争は、広範囲の思想啓蒙を実現したが、もう一方で、その過激な理論と先取りする意識は、高いレベルの“名人戦”のような形にとどまり、ついに中国の現実問題を解決できていない。また、盛んに行われた論争が作った雰囲気は賑やかであるが、一時的に幕が降りた。啓蒙の効果は目立っているが、徹底的に民衆の思想や観念を変えられず、因襲守旧の社会体制まで壊すことができなかった。例えば、周作人は自分発表した文章について次のように述べている。「我々はこれらの両性論理に関する意見を発表して、ただ自分が言いたいことであるが、まさか最近或いは最遠の将来に何か効力の発揮を期待してはあるまい！（中略）その結果、自分の言いたいことが言ったので満足できるしかない。（中略）我々の高遠の理想境地は、到底我々の心の中に独自娯楽のフイルムに過ぎない。」[XXXI]

第二に、新文化運動の最中に多くの学者が参加し、それぞれ自分の立場に立って問題を取り上げ、或いは問題をめぐって論争したが、その数多くの学者は、思想形成中出会った人と触れた知識が相違し、それぞれ取り上げた問題や見方も違うので、思想的には大分ずれている。だから、個人主義、写実主義、貞操問題、女性解放などの重要な概念や重大な問題に対しての理解も違い、最後に文壇の統一的な認識を得られなかった。そればかりではなく、学者たちは、大体自分の意見に固執して、それぞれの道を辿っていった。この点は明治時代の日本には及ばない。その好例として、魯迅と周作人兄弟も最後に兄弟であるにもかかわらず、ついに分かれ

[XXXI] 周作人 「与友人論道徳書」『周作人自選集・雨天的書』 河北教育出版社　2002年　第106頁

て、それぞれの道を歩んでいった。

第三に、新文化運動中積極的に推進された文化革新は、男性中心に行われた運動であるが、初期の女性啓蒙と同じように男性意識による女性解放言説の構築である。その理論は高いレベルに達したが、女性たちはこの身で直接に参加はしなかったので、中国の女性解放に果たした役割はそれほど大きくないと言える。この点に対して、現代の女性研究者は、ずばりと次のように言い当てた。「それは中国現代初期にあった女権啓蒙と同じぐらいで、男性言説による女性ないし女権の構築であるが、女性たち自身が創建し、或いは女性たちが従事する事業ではない。」[XXXII] これも近代の日本とずいぶん相違する。日本の場合は、男性思想家の啓蒙の結果、女性たちの自我目覚め、自我成長の中で“青鞜社”のような女性団体が結成され、“新しい女”も登場して、自分自身の教育、職業、参政権獲得及び女性の恋愛結婚、妊娠断絶の権利のために戦っていた。中国には秋瑾のような過激な革命女性もあったが、啓蒙を受けて数多くの女性の活躍や女性グループの結成と闘いは、ついに見えていなかった。

第四に、中国の新文化運動は、男性文化人が持っている知識や反封建思想、「民主」「自由」を要求する動き中での大爆発と言える。その中で、女性問題と女性解放も問題視されていたが、他の問題と同じような扱い方であり、ただ理論啓蒙の表面に留まっていた。欧米先進の女性解放思想は、いろいろと紹介されてきたが、具体的に運用することがなかった。例えば、茅盾はエレン・ケイの女性論を高く評価し、ケイの理論を拠り所にして社会批評や女性解放運動に身を投げたが、中国の社会発展と女性の生存状況と結びつけて見ると、女性の解放はなかなか難しいと思って、ついにケイの思想に疑いを抱えるようになった。最後にケイの母性主義を「理想的、完全に母性の意見」[XXXIII] と見做し、真理であるが当時の中国で実現しにくいと結論をまとめた。その結果、エレン・ケイの女性解放論は、中国で殆ど広げられていない。特に、その女性性を強調する母性主義は、今までも時代遅れのものとして認識されている。[XXXIV]

第五に、1920年代主流雑誌に行われた「貞操問題」論争、「新性道徳問題」論争、「イプセン号」特集及びその後の「愛情大討論」などは、人間の個人解放と女性の身体解放を中心に、人間性を束縛する旧道徳の打破と個人の言いふらしの必要として行われて、当時の社会に大きな影響を与えた。しかし、この時期の文化人は、同時に民族、国家解放の重任を負うため、その結果、個人官能的な自然人の叫びは、民族、国家の解放を自分の任務とする新文化人の社会人意識と衝突し、最後は、合流したり後者に圧倒されたりしてしまったので、個人性の伸長は大分制限され、無視されるようになってきた。それは歴史的宿命だと言えるだろう。

（本研究は中国国家留学基金の助成によるものである。）

[XXXII] 劉慧英　「“婦女主義”：五四時代的産物―五四時期章錫琛主持的『婦女雑誌』」『南開大学学報』（哲学社会科学版）　2007年 第6期

[XXXIII] 瀋雁氷「愛倫凱的母性論」『東方雑誌』第17巻第17号　1920年9月

[XXXIV] 邱雪松　「“新性道徳論争”始末及影響」『中国現代文学研究叢刊』　2011年第5期